学校教育委員会報告

学校交流会（準備会）を開催して

河田　直樹*
Naoki Kawada

昨年（2019年）の11月9日（土）に，埼玉工業大学（埼玉県深谷市）にて，学校委員会行事として，学校交流会（準備会）を開催した。

当交流会は，学会の活性化に少しでもつながるように，学校委員会委員の他，現役の学生や，学生時代に品質工学の研究に関わった各大学OB，元学校関係者，一部企業教育の経験実績がある方々に参加いただき，学生の卒業研究に関する発表と，品質工学の教育に関する意見交換の場として開催した。

また，持続可能な会合とするために，交流会の内容としては，あまり規模を大きくしないこととし，半日程度で収まるように以下の構成とした。

(1) 教育関係者による講演（品質工学や技術教育に関する課題の提示や解決策の提案など）
(2) 学生による研究発表（参加人数に応じて発表時間を調整）
(3) 教育に関するディスカッション（学校教育の課題と解決策についての情報交換）

また，会員や学校委員が全国に散らばっていることから，遠隔会議システム（実際には費用を抑えるためグループチャットを利用）も併用し，遠隔地からの参加も試験的に実施した。

場所については，できるだけ大学等の教育機関を利用し，開催日はできるだけ教職員の予定を確保しやすい休日を選ぶこととした。

今回は，埼玉工業大学の会議室を会場として，13時～17時の間で開催し，概ね講演と質疑等で90分，研究発表と質疑で90分，ディスカッションで60分という時間配分となった。

講演は，電気通信大学での品質工学の教育の経験がある神奈川立産業技術総合研究所の高橋和仁氏による「電通大での研究教育と神奈川産技総研での研究」に関するテーマであった。

まず，矢野宏氏の品質工学に関する教育の姿勢や当時のさまざまなエピソードが語られ，そこで学んだ者として，忘れかけていた基本に立ち返ることができた。特に「研究する前に論文を書け」は会員各位にも思い起こされることがあるのではないかと思う。また，1/10の法則（品質工学を学んだ者で，実務に適用し，長く続けているのはおよそ1/10の人間である）というのも，卒業後に参加した学会・研究会で耳にしていたことが思い起こされた。これについては，ある意味において教育者が学生への期待と教育への力の入れ方に関わってくるかもしれない。

次に，神奈川産技総研での研究について紹介があり，公設試ならではの品質工学の展開の仕方があることを理解した。私自身も民間から大学へと立場を変え，それまで以上に品質工学に接する時間が増えている一方，逆に教育をするという点では，企業にいた時よりも難しい課題があり，それぞれの立場にあった展開の仕方があることをあらためて認識することとなった。

学生による発表は全部で4件あり，いずれも埼玉工業大学工学部機械工学科の卒研生からの発表である。学生は他の大学へ出向いて研究活動することがなかなか難しいため，どうしても開催大学からの発表になりがちなので，テーマの多種多様さが若干失われてしまうものの，質疑応答の状況からすれば，非常に盛り上がった発表となったと言える。

発表内容には，まだまだ改善の余地があるものの，一部の質疑応答をきっかけに白熱した議論も巻き起

*埼玉工業大学